



# どんぐりころころ

〈新潟県〉

澁谷 しぶや

奈緒美 なおみ

34歳

小児科に勤めていたころ、病室には毎日童謡のメロディーが流れていた。完全看護のため、日中しかわが子と一緒に過ごすことができない家族は、面会終了時間までをここで過ごす。

新人のころ、私が初めて受け持たせていただいたT君は、脳性まひの10カ月児だった。T君は、呼吸器をつけていて目を開けることも手を握ることもできない。呼吸が安定せず、自宅に退院できるめどは立っていなかった。

音楽教員のお母さんは毎日面会に来られ、ふっくらした手で優しくT君をなでて、耳元で童謡を口ずさんでいた。口のチューブから入るミルクの量を記録し、今日の体重を看護師に尋ねるのが日課だった。

ある時お母さんは、病室に流れる

「どんぐりころころ」をT君の耳元で口ずさみながら、「ねえ、看護師さん。どんぐりはお山に帰れたのかしら。Tはまだ帰れないけれど、どんぐりは帰れたのかしら」と言われた。お母さんの頬に涙が伝う。

どう返事をすればいいのだろうかと考えながら、笑顔で話を聴くことしかできない。いや、笑顔どころか、涙が出てくる。「涙よ止まれ、止まれ！」と思うが、さらにあふれてきて止まらない。

T君が生まれてから今日まで、お母さんはどんな思いで歌い続けてきたのだろう。厳しい現実を受け止めながらもわずかな期待を持って過ごす中で、抱えきれない思いが涙にあふれてきたのだ。

狭い病室におえつが響く。数分間、

2人で周りを気にせず泣いた。涙を拭いて、ふとT君を見たら、トローンと目じりが下がり、笑っているように見えた。

お母さんが力強く言った。「『どんぐりはお家に帰れたよ、僕もがんばるね』って言っているのね。T、絶対にお家に帰ろうね」

お母さんは答えがほしかったのではなく、精いっぱい苦しい今を、ただ聴いてほしかったのだと思った。

1年後、T君は呼吸器をつけて自宅に退院することができた。何もできないと思っていた新人の時に、話を聴くことの大切さに気付けたことが今、精神科で働く私の宝物である。